

「橋」としての建築

—高梁市立吹屋小学校の調査から—

はじめに 平成16年度、岡山県高梁市成羽町吹屋に所在する高梁市立吹屋小学校校舎の建造物調査を文化遺産研究部建造物研究室が受託した。吹屋小は明治33年の開校以降、明治42年にかけて順次建設された校舎が一括して現存し、なおも現役で使われ続けている希有な事例である。調査の詳細は『高梁市立吹屋小学校校舎調査報告書』（高梁市教育委員会、2005）に譲るとして、ここでは校舎群のうち本館を通して知り得た、明治期における建築伝播の様相について報告したい。

吹屋小学校本館の建築 明治42年竣工の本館は、左右対称の木造2階建寄棟造で、外壁は下見板張とするが、中央2階欄間以上を真壁として交差する筋違を入れたハーフティンバーの表現を採り、玄関口に木製アーチを入れた特徴的な外観を持つ。平面は、両翼部に教室を置き、中央部1階を校長室、教員室、2階を7間×8間の講堂とする他、1階奥に桁行全長を貫く幅3間の屋内運動場を置き、むき出しのトラスを入れて2階講堂を支える大胆な構成を採る。わけても外観の形式は、岡山県内にいくつか現存する同時期の建造物と共通性を持つ。遷喬小学校（明治41年、国重文）を代表とするそれらの建築は、「江川式」建築と呼ばれる、岡山県工師江川三郎八の作風に端を発する形式である。吹屋小学校本館についても調査の結果、江川の設計になる可能性が指摘された。

江川三郎八という人 江川三郎八は、福島県出身の元大工で、明治35年に岡山県に異動するまでは、福島県庁で営繕を担当しており、その中で洋風建築を修得した人物であった。そのため、「江川式」建築は岡山県内のみならず、福島県においても多数建設された。例えば福島県尋常中学校磐城分校（明治34年、現存せず）は外観が遷喬小学校と酷似している。遠く福島と岡山が、江川を通して結ばれていたことを知りうる。また、江川は外観のみならず構造にも独自の作風を築いていた。明治25年の須賀川橋（福島県須賀川市、現存せず）において木造ハウトラス橋の現場監理を任された江川は、木造トラスによる構造を独自に研究し、ついに「江川式小屋組」を編み出すに至った。吹屋小本館の講堂部小屋組は、現存する他の江川作品の大スパン構造同様に、クイーンポストではなく、

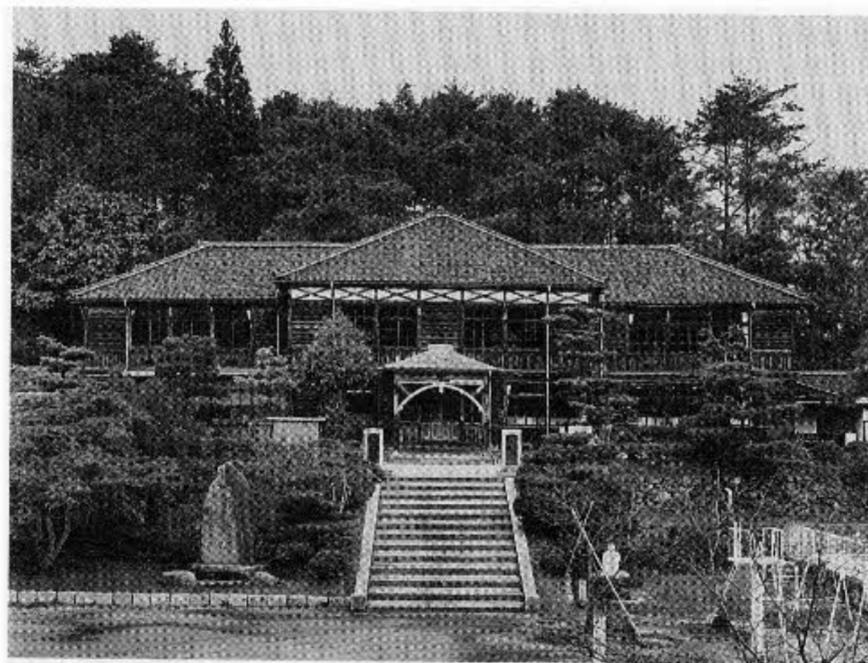


図31 吹屋小学校本館正面外観

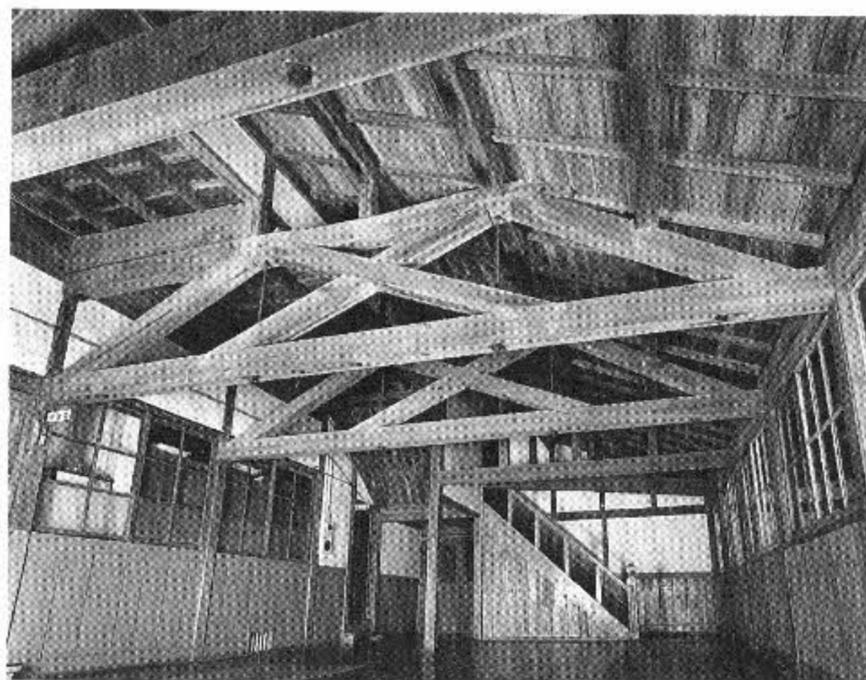


図32 吹屋小学校本館屋内運動場のトラス

橋梁状のワーレントラスを組んだ上にさらにキングポストトラスを載せる形式を採用している。いわば江川は建築に橋の構造体を挿入することで、大スパン空間を実現していったわけである。さらに吹屋小本館では、1階の屋内運動場にもワーレントラス状の構造体を入れて上階の講堂を受けている。すなわち吹屋小本館は、まさに橋の構造体を最大限に応用した、「江川式小屋組」の典型として理解されるのである。

おわりに 吹屋小学校本館は、近世以来の大工の伝統と洋風建築とを、そして福島県と岡山県とを架橋した人物の代表作である。そして、まるで橋を架けたかのような構造。明治の建築伝播の一端を典型的に示すこの建物が文化財としての高い価値を持つことはいうまでもないが、その価値の根底には、「橋」というメタファーが隅々まで浸透しているのだった。

（清水重敦）